

# 南河内郊外における神社祭祀に関する一試論

——美具久留御魂神社秋季例大祭の事例から——

濱 田 時 実

〔抄 録〕

大阪府富田林市にある美具久留御魂神社の秋季例大祭はだんじりが出る特徴がある。同地域は、「都市」や「農村」ではなく「郊外」と呼べる地域である。南河内においてだんじりが出る祭りは太子町にある科長神社の夏祭りで始まり、美具久留御魂神社の秋季例大祭で終わると言われている。したがって、だんじりが地域の祭礼における象徴ともなっている。本稿ではだんじりに関係する行事を主として取り扱う。

これまでの地域研究において、民俗学が扱ってきたフィールドは大きく分けると「都市」「農村」「山村」「海村」に分類することが可能だが、現代におけるフィールドの概況は必ずしもそれらだけでは十分と言えない。祭礼研究においてもフィールドがそれらの分類に属していることを前提として論が進められているのが現状であり、祭礼研究の大きな課題である。

本稿では、「都市」「農村」などに属さず、これまで民俗学が取り扱うことのなかった「郊外」という立場に注目し神社祭祀の現状を取り上げる。そして都市祭礼とも村落祭礼とも呼べない、郊外における神社祭祀の事例から、祭礼研究における課題を主張したい。

**キーワード** 郊外・現代・祭礼・だんじり

## はじめに

本稿は、大阪府富田林市にある美具久留御魂神社秋季例大祭の事例から、これまで祭礼研究の中で分類されてきた都市祭礼や村落祭礼のどちらにもあてはまらない祭礼の存在を主張するものである。富田林市をはじめとする、いわゆる南河内では秋にだんじりを出す祭りが多く見られる。認知度の高さとしては、9月に岸和田市で行なわれる岸和田だんじり祭りが圧倒的だが、南河内では岸和田市以外でも多くの地域で夏から秋にかけてだんじりを出す祭礼が行なわれる。拙稿「南河内の神社祭祀と住民組織—大阪府南河内郡太子町山田の例を中心に—」（『鷹陵史学』第38号）で取り上げた太子町の科長神社の事例では夏にだんじりを出す夏祭りであるが、それ以外の南河内地域は秋に行なうことが特徴である。地元民の間では「（だんじりが出

るのは）科長神社の夏祭りで始まり、美具久留御魂神社の秋祭りで終わる」とも言われており、1年の中で南河内におけるだんじりが出る祭りは当社秋季例大祭が最終であり、神に五穀豊穡を感謝する祭りとして営まれている。

さて、各地では地域内で守り続けられていた制度や志向性の維持が困難となり、変化せざるを得ない状況は今日もなお続いており、現代の祭礼は大きく変化している。第1次産業が衰退し、主たる生業が第2次・第3次産業へと変化した現代では、地域内の風習や文化も自ずと変化している事実がある。伝統的な祭礼もその中に含まれる。祭礼に関する研究はこれまで民俗学をはじめ、社会学、文化人類学、観光人類学など幅広い領域からのアプローチがなされ、膨大な研究成果があがっている。本稿で扱おうとしている現代の祭礼に関して着眼点を置くと、近年の研究では現代ならではの問題として「祭りのイベント化」「地域外の人々の関与」「祭りの変遷」という3つのキーワードが提示できよう。

まず、「祭りのイベント化」について論じられた石川俊介の研究がある。石川は、諏訪大社下社御柱祭「木落し」の事例から、下社木落しは本来なかったものであり、必ず行なわなければならないものでもなく、御柱祭の目的とは無関係の「イベント」であることを指摘し、祭りがイベント化されていることを指摘した<sup>(1)</sup>〔石川2008〕。

次に、地域内の人口が減少し、伝統の継承のために他所者を迎え入れている現状を報告した菊池淑人の研究がある。岐阜県高山市の旧城下町地域における伝統的祭礼について、祭りの担い手が減少し、囃子の口伝による技の継承の必要性和採譜／記録を軸とした保護事業は限界を迎えているとする一方、積極的にアルバイトなどで他所者を迎え入れている現状報告と、伝統的な地域社会における祭りの諸問題について述べている<sup>(2)</sup>〔菊池2012〕。

祭礼にかかわる他所者について、いち早く注目したのが金賢貞である。金は茨城県石岡市常陸国總社宮大祭の事例から、他所者というキーワードに着目し、これまで祭りの研究において扱われることが少なかった地域外の人々、すなわち他所者に着目し一論をあげている<sup>(3)</sup>〔金2006〕。

一方で、大久保実香・田中求・井上真は、過疎化が進行する地域において、若者組が主体的に担っていた祭礼が今日では他出者が主体となって運営されていることを指摘し、今後の地域の維持には他出者が参与する可能性を述べている<sup>(4)</sup>〔大久保他2011〕。

また祭りの変遷という視点からの研究として入江英弥の研究がある。入江は福島県いわき市の祭礼を事例に取り上げ、近世、近代、現代における祭りの変遷を述べている。その中で、これまで説かれてきた祭りの意義について疑問視し、その時々の人々の願いが祭りの内容に反映されていると指摘している<sup>(5)</sup>〔入江2012〕。

これら近年の諸研究から、現代における祭礼研究は、祭りに関わる他所者の存在についての考察や祭りの変遷に関する考察、あるいは祭りを観光化の一要素として捉えることが可能であるという成果が残されている。一方で、フィールドが持つ性質、すなわち「その地域が都市で

あるのかあるいは農村であるのか」という点を見落している。現代の祭礼の研究を行なう上で、あらためてフィールドの属性を意識する必要がある。そこで本稿では、「都市」や「農村」などでは語り切ることができない「郊外」という新たな概念設定を行ない、当社秋季例大祭の事例を述べていくこととする。なお、本稿ではだんじりに関係する行事を主として取り扱う。

では本稿のキーワードともなる「郊外」について見ていこう。これまでの研究では、民俗学や社会学などの領域から「都市」という用語の学問的位置付けは行なわれてきたが「郊外」という規定は社会学の立場からのみ行なわれてきた。「都市」に関する定義は、近年では、人口規模の大きさや、第1次産業ではなく第2次・3次産業の比重の大きさといった主たる生業からの観点から定義づけられている。いずれも、「都市」を形成する上での地域中心的な機能によるものとされている<sup>(6)</sup>。

社会学からは『現代社会学事典』にも記されているように「都市」は、「社会的交流の結節に位置し、相対的に大量で高密度の人口を擁する点で村落とは区別される集落（中略）どのような集落や地域社会を「都市」と見なすかは論者によりさまざま、調査・研究で「都市」と見なされる集落の規模や形態も多様である」と述べられている<sup>(7)</sup>。この文言を見ても明らかだが、「都市」という厳格な定義づけは事実上困難であることが指摘できる。しかし、少なくともこれまでの祭礼研究において、特に「都市」と呼ばれる地域は前者による論を受け継いでいる感は否めない。そこで「郊外」という用語に注目したい。

民俗学において厳密に「郊外」を定義した研究は筆者の確認する限りでは存在しておらず、むしろ社会学からのアプローチが積極的である。中でも、若林幹夫は現代における郊外は、単に都市の近郊ではないと指摘した上で、20世紀の産業化の中で都市で働く人々が増加したことをふまえ、「都市に付属し、都市と通勤や通学、買い物や娯楽などの行き来によって結びついた、そんな住宅地の中心場所」とであると指摘した<sup>(8)</sup>。そして、国語辞典に記載されている「町外れ」という意味の理解に加えて、郊外生活者の立場からするならば、郊外は「都市との関係で現れてくる領域であり社会である」と定義付けている<sup>(9)</sup>。また、都市の中心市街地の外側の地域を、その用途や状態にかかわらずに総じて「郊外」と呼ぶことが一般的であるとされ、特に今日では、近代化や産業化による都市の機能や形態の変容によって成立したとされている。以上、社会学の立場から「郊外」がどのように理解されているのかについて見てきた。現代を考える上では、「郊外」と呼ばれる地域に着目することは重要であると考え。そこで本稿では「郊外」を「かつては第一次産業が主たる生業であったが、高度経済成長期を境に第三次産業が主となり、新興住宅地の開発が進み、都市への通勤や通学が行なわれ発展した地域」と定義し、美具久留御魂神社秋季例大祭の事例を述べるとともに、南河内郊外における神社祭祀について考察していきたい。なお、本稿ではだんじりの動きに主眼を置くため、神事については別稿にて述べることとし、都市祭礼は東京や京都、大阪といった一般的な大都市における祭礼であるものとする。

## 1. フィールドの概要

図1 富田林市位置図



図1 富田林市位置図

美具久留御魂神社は、寺内町として栄えた大阪府富田林市にあり、同市は大阪府の南東部に位置している。とりわけ同社は近鉄長野線喜志駅より徒歩で10分ほどの場所にあるところで、かつては農村として栄えていた地域であった（図1・2）。なお、同地域から大阪市内のターミナルまでもおよそ30分で行くことが可能で、富田林市内の駅利用客数は最も多い<sup>(10)</sup>。また、神社に隣接するように国道170号線（外環状線）が走っているため、交通の便はよい方である。2014年5月現在、宮町は391世帯、1031名が住んでいる。富田林市全体で言えば49,969世帯、116,353名が住んでいるため、市内でも比較的小規模の地域であると言える。2010年時点での富田



図2 美具久留御魂神社と周辺地図

林市における産業別の比率は第1次産業が1.7%、第2次産業が27.6%、第3次産業が68.8%となっている。同地域および周辺地域は1950年代から1970年代にかけて大きく様変わりした。地形図やインフォーマントからの情報を総合すると、少なくとも1950年代頃までは田畑や山林が広大に広がっていたが、高度経済成長期に同地域は休耕田や山林を宅地化し、新興住宅地と





写真1 美具久留御魂神社

して開発されたのがそれである。

当社の主祭神は美具久留御魂大神(=大国主命)で、ほかに天水分神、弥都波迺売神・国水分神・須勢理比売神を祭っている(写真1)。氏子圏は喜志・新家・中野・新堂・富田林・毛人谷・若一・寺内町・宮・櫻井・川面・木戸山・平・尺度・東阪田と広域にわたるが、東阪田を除く各町はだん

じりを1台ずつ有する。神社に隣接する地域に梅の里・南旭ヶ丘があるが、これらは新興住宅地であるため氏子名簿からは除外されており、秋季例大祭への参加はしていない。また、明治時代に合祀が行なわれたことから、尺度や東阪田のように現在の行政区分で言えば羽曳野市に所属する地域も氏子圏となっている。

本報告で主として扱う宮町は、行政区分としての宮町が宮町1丁目～3丁目まで存在するが、町会としての「宮町」は宮町1丁目と2丁目、そして3丁目の一部の家である。一部の家は、宮町1丁目や2丁目から分家した家であったり、従来から宮町3丁目に住んでいる家である。したがって、外部から移住してきた宮町3丁目の家々は「宮町」には所属しない<sup>(1)</sup>。また宮町1丁目～宮町2丁目にはごく一部ではあるが、外部からやってきた人々(以下、ヨソモノ)もいるという。「宮町」のエリアであるため「宮町」側からヨソモノへ町会への加入も積極的に行ない、彼らは「宮町」へ加入しているが祭りへの寄付は拒んでいるという。

以上を踏まえると、本稿で扱うフィールドは「郊外」と呼べる特徴を多分に含んでおり、これまで民俗学が捉えてきた「都市」とは異なった性格を有していると言えよう。すなわち、「第3次産業を主たる産業とした高密度の人口を擁し、かつては農村であった地域が土地開発などによって新興住宅地化され、農村・新興住宅地を有した、昼間人口よりも夜間人口の方が多い地域」と定義づけられる「郊外」と呼べるだろう。

## 2. 美具久留御魂神社秋季例大祭

### (1) 祭りの担い手・組織

「宮町」には子ども会、青年団、自警団、友睦会、老人会、婦人会があり、組織に加入するためには町会に加入する必要がある。そして婦人会を除くそれぞれの組織には所属可能年齢が設定されており、子ども会は小学校6年生まで、青年団は中学校1年生から19歳まで、自警団は20歳から50歳まで、友睦会が51歳から60歳まで、老人会は61歳からとなっている。しかし、組織の中でも青年団と友睦会は20年ほど前までは存在しなかった。これはだんじりが復活した際に、青年団・友睦会に所属可能な年齢に該当する人々が、ムラの組織から一時的に外れてしまい無所属となることから、ムラの人々によってこれらを回避するために組織を構成したとされている。注目すべきは、子ども会や青年団以外の組織では加入可能な性別が明確に分かれて

いることである。自警団、友睦会、老人会には男性のみが加入していて、女性は婦人会に加入することになっている。

総代は現在でこそ町会から総代を務めてくれそうな人に直接懇願する形で決定されているが、少なくとも戦前までは家格を重視して選択されていた。家格が重視されなくなったのは、戦後の施策である農地解放に伴うものが最も大きく、以後家の関係はフラットなものになったが、祭り以外の神事についても関与してくる組織であることから、積極的に神事へ参加できる／する意思がある人々に声かけをしているという。

また、秋季例大祭に関連する組織として喜秋会がある。正式名称は喜志地区秋祭り実行委員会で、通称喜秋会と呼ばれている。宮・櫻井・川面・喜志・木戸山・新家・平・尺度の各町の代表者によって構成されている。その他、関連する組織には美魂連と呼ばれる組織もある。これは、だんじりを有する全ての町の代表者によって構成されている。喜秋会と美魂連のいずれの会長も、構成されている町の輪番制で決められており、前者は5年ほど前に、後者は20年ほど前に成立したものである。

ところで、宮では当社秋季例大祭の担い手として参加するために厳しい条件が設定されている。町内に2世代以上住んでいることが条件であるが、2世代以上住んでいた人が他町へ転居した後も祭りに参加する場合は、宮に対して祭りが始まる前に誓約書を提出することが求められている。

## （2）安全祈願と試験曳き

美具久留御魂神社秋季例大祭は10月第3週の金曜日から日曜日にかけての3日間行なわれている。秋祭りによく見られるが、当社秋季例大祭も冒頭で述べたように神に対して五穀豊穡を感謝する目的がある。それでは、現在の当社秋季例大祭について述べていきたい<sup>(12)</sup>。

10月第1日曜日には祭りの無事を祈願する安全祈願が行なわれる。各町の役職に就いている人々が神社で御祓いを受けるが、宮のみだんじりを神社まで曳いている。これは宮が神社から非常に近い距離にあるためだとされている。安全祈願は午前中に行なわれ、蔵から出されただんじりは神社へと向かう。神社境内に到着すると役員が鎮魂殿へと入っていき、その他の関係者は社務所外で待機となる。役員の祈禱が終了すると、神職がだんじりの御祓い及び待機している関係者の御祓いを行なう（写真2）。

試験曳きは安全祈願の終了後に行なわれる。現在は警察からの道路使用許可の関係上、神社からだんじり蔵までのわずかな距離となっている。この試験曳きには地域住民と警察との理解の差が明らかとなっている。つまり宮の人々による理解は、安全祈願



写真2 安全祈願の様子

の後に行なわれるものであるが、警察は後述する10月第3金曜日に行なわれるものが試験曳きであると理解している。

試験曳きの後には御花(寄付金)を集める作業が始まる。この寄付金によって、青年団を中心に「宮町」の家々を回って御花をもらうが、「宮町」に所属しながらもヨソモノは寄付を拒むという。

### (3)本殿祭(宵宮)

現在の当社秋季例大祭は10月第3週の金曜日から日曜日の3日間行なわれる。初日は本殿祭(宵宮)と呼ばれ、夕刻から各町でだんじり曳きが行なわれると同時に、神社では本殿祭が行なわれる。本殿祭では、総代や後に述べる稚児の当番町の代表者など計30名ほどが参列し神事が営まれるが、当社宮司と禰宜以外に大阪府神社庁第11支部に所属する神社の中から手伝いが可能な神職が応援で駆け付けることになっている<sup>(13)</sup>。

宮では、当社の鳥居まで移動した後、中野・新堂・櫻井・若一が集まる中野町消防分団車庫を目指す。5台のだんじりが集結すると、美魂連と中野町会長からの挨拶と役員による乾杯が行なわれ、中野町内でだんじりが曳かれる。新堂→若一→櫻井→宮→中野の順に曳かれ、若一と新堂はそれぞれの町へ戻るが、櫻井と宮、中野は再び中野町消防分団車庫へ戻る。ここで小休憩を挟み、喜志駅方面へとだんじりが曳かれ、宮は巡礼街道と呼ばれる通りを通して町へ戻る。神社では24時を回ると翌日の神輿渡御に向けて、宮司と禰宜の両名が神を遷す神事に入る。

### (4)本宮

本宮で行なわれるだんじり関連の行事は本殿祭(宵宮)と同様、イベントのような要素が含まれているが、神事を伴うことから同日が本来の主祭日であるという。同日は午前中にだんじりが曳かれ、午後から稚児の社参と乙女舞が行なわれる。稚児と乙女舞の演者は複数の町が輪番制で担当するが、いずれの町も6歳くらいまでの男女と決められており、8年に1度回る。稚児の年齢上限を超過した小学生の中で、女子は乙女舞を舞うこととなる<sup>(14)</sup>。なお、稚児の社参と他の祭りの行事は同時進行され、美魂連主催のイベントに参加するためにだんじりを曳く町もある。

稚児社参は、神職が先導し、箏や笛、龍笛の演奏のもと、当番町の役員らと共に富田林市民会館を出発する。行列にはなっているが、親子で並んで歩く稚児や、親に抱かれて行列に参加する稚児もいる(写真3)。神社へ到着すると、稚児は10人程度ずつ下拝殿にて御祓いを受ける。御祓いを受けた後、社務所にて待機し全ての稚児の御祓いが終わると、引



写真3 稚児社参

換券との交換で稚児社参の記念品として土産をもらう。稚児社参の後には乙女舞が行なわれるが、演者らは下拝殿にて御祓いを受けて境内で乙女舞を舞う。稚児社参や乙女舞が行われるようになったのは、昭和30年代後半に大神輿が破損したために新たに設けられたものである（写真4）。



写真4 乙女舞



写真5 神輿渡御

その後、子ども神輿が御旅所まで昇られる神輿渡御が行なわれる（写真5）。稚児と乙女舞の当番町はまた、子ども神輿の当番町であり神輿渡御には青年会のメンバーも補助に入る。子ども神輿は2日目と宮入りの2日間は下拝殿に鎮められている。行列の隊列順は先祓い（神職）→猿田彦→獅子舞→神輿→宮司である。御旅所までの道中に他の町のだんじりや集会所の前を通過する際には、特に大きく神輿を上げる。御旅所へ到着すると、2基の神輿は石で作られた台座に鎮められ、御旅所祭が営まれる。御旅所祭は献饌、宮司による祝詞奏上、総代や当番町の代表者らによる玉串奉奠、撒饌などのごく一般的な神事である。その間、他の町のだんじりは曳かれるが、御旅所近くではお囃子が聞こえる程度の静かなものとなる。御旅所祭が終了すると、しばしの休憩の後に神輿が神社へ戻される。その後、夕刻から神社境内にて景品付餅まきが行なわれ、「祭」「祝」と書かれた餅を手に入れると、景品がもらえるものとなっている。

夜の部に入ると、木戸山・喜志・川面・喜志新家・櫻井・宮・尺度・平の各町のだんじりは喜志駅東側にあるロータリーへ移動する。これは喜秋会主催のイベントに参加するためである。このイベントは、一般の見物人向けにだんじりのパフォーマンス、一般的にシャクリやシコリと呼ばれる行為を行なう、各町思い思いのだんじりパフォーマンスをするものである<sup>(15)</sup>。全町のシャクリが終了すると、景品付餅まきが行なわれるが、2013年は雨天により中止となった。

喜秋会主催のイベント終了後は、再び各町へ向けてだんじりが曳かれる。宮では町へ戻った後に母と娘による親子俄が行なわれ、俄終了後には来年の親子俄の担当者を決定する。

#### (5)後宴祭

祭り最終日は後宴祭と呼ばれる。各町のだんじりが神社へ向かい俄を奉納する。宮入りする前に、宮はだんじりを曳きながら他の町の子どもだんじりを迎えに行く。そして御旅所付近で



待機し、子どもだんじりの宮入りを見届ける。これを宮の人々は迎えだんじりと呼んでいる。全ての子どもだんじりが参道へ入ると、続いて大人だんじりが宮入りをする。

宮入りをする際、子どもだんじり・大人だんじり共に鳥居下までの道や東高野街道で、激しく上下・左右に揺さぶったり前進後進を繰り返すシャクリをする(写真6)。鳥居前で何度も行なうのは鳥居をく



写真6 宮入り時のシャクリ

ぐると、俄を奉納するまで戻ることができないためである。なお、宮入り順以下の通り固定化されている<sup>(16)</sup>。

〔子どもだんじり〕①毛人谷②富田林③若一ひよこ会④寺内町

〔大人だんじり〕⑤宮⑥櫻井⑦川面⑧喜志⑨木戸山⑩喜志新家⑪平⑫尺度⑬中野⑭新堂⑮若一

宮入り後は、神社境内まで移動し俄を奉納し、それぞれの町のシャクリを行なう(写真7)。ここで行なわれる俄を奉納俄と呼ぶ。奉納俄は練習以外で他人に見せることはできず、神への奉納の際に初めて人間も見ることができる。全町の奉納俄が終了すると引き続いて美魂連メンバーによる乾杯が行なわれる。その後、神輿蔵から神輿が出され神輿昇きが行なわれる<sup>(17)</sup>。神輿は、現在は各町から5～6名ほどの有志を募って担いでいるが、2010年頃までは神輿の老朽化により担ぐことはもちろん、動かすことすら困難な状態であったことから、神社境内にある神輿蔵を開放するだけであったという。神輿は大神輿とも呼ばれ、重さ約2トンもあるため大勢で担いでも鳥居の側まで行くのがやっとである(写真8)。



写真7 奉納俄

全ての予定が終了すると、各町のだんじりがそれぞれの町へ戻る。戻る順番は宮入りの順と反対で、必ず御旅所横の鳥居を通して戻る。宮のだんじりは送りだんじりとして、御旅所横まで移動し、南北の方角へだんじりで一礼する。しばしの休憩後は、任意の町による喜志駅ロータリーでのイベントが行なわれる。これは前日のイベントと同じ内容で、参加町によるだんじりのシャクリが行われる。イベント後は、各町で自町の奉納俄を地域住民に対して披露し、その年の祭りは終了となる。



写真8 神輿昇きの様子

### 3. 郊外の祭礼

#### (1) 当社秋季例大祭の象徴

日本の産業は、高度経済成長期以降、第1次産業が衰退し第2次・第3次産業の発展が著しい。いわゆるビジネス街が誕生し、それは都市部へ集結するようになる。人々は都市部への通勤のために、都市の外側へと通勤がしやすくよりよい環境のもとへ住宅地を求めるようになる。その地域こそ、鉄道の敷設や道路整備がなされているところである。まさに、現代の「郊外」が誕生したとする理解が可能であろう。

ここで、郊外における祭礼の特徴を考察する前に、当社秋季例大祭における象徴について述べておこう。先述のとおり、当社秋季例大祭はだんじりが出る祭りである。表1は、当社秋季例大祭を時系列に展開したものであるが、神事とだんじり関連行事が並行して行なわれていることがわかる。しかも、神輿渡御が行なわれている間にもだんじり曳行が行なわれている点にも注目できる。神輿渡御では子ども神輿を用いているために、専ら担当町の子どもたちが神輿渡御での中心メンバーとなるが、担当町のだんじりも曳行が行なわれている。

表1 美具久留御魂神社秋祭り時系列表

日	場所	時間	行なう人	概要（神事）	場所	時間	行なう人	概要（だんじり）
10月第1週目 日曜日	美具久留御魂神社	8:50	町	だんじり出発				
	↓	9:00	禰宜・役員	役員祈禱				
	↓		町	だんじり祈禱				
	↓	午後	町	御花回収				
10月第3週目 金曜日	美具久留御魂神社	20:00	宮司・禰宜	湯立神事	宮→中野	19:00	町	だんじり曳行
					中野	19:40	町	宮・櫻井・中野・新堂・若一の各町合同でだんじり曳行
					中野→櫻井→喜志→宮	20:40	町	だんじり曳行
10月第3週目 土曜日	美具久留御魂神社	10:30	宮司・禰宜	頼宮祭	宮→櫻井→喜志→喜志新家→尺度→平→宮	8:10	町	だんじり曳行
	↓	12:30	稚児 宮司・禰宜	稚児社参	宮→櫻井→中野	12:10	町	だんじり曳行
	↓	14:00	乙女	乙女舞	雇用能力開発団地	13:00	町	美魂連によるイベント
	美具久留御魂神社 →御旅所	15:00	神輿当番町	神輿渡御	中野→櫻井→宮	15:30	町	だんじり曳行
	御旅所	↓	神輿当番町・宮司・禰宜	御旅所祭	宮→櫻井→喜志駅	18:15	町	だんじり曳行
	美具久留御魂神社	17:00	一般	餅まき（※）	喜志駅ロータリー	18:50	町	喜秋会によるイベント
					宮町内	イベント終了後	町内所属の親子	親子俄
10月第3週目 日曜日	美具久留御魂神社	10:00		後宴祭	宮→櫻井→中野→若松→中野→御旅所	8:00	町	だんじり曳行(迎えだんじり)
	↓	10:30	町	宮入り	美具久留御魂神社	10:30	町	宮入り
					宮→御旅所→宮	16:00	町	だんじり曳行(送りだんじり)

だんじり曳行ルートは2013年筆者調査の宮町のものである。

※餅まきは神社で行なわれるが、神事として取り扱っていない。

だんじりの数に注目してみると、現在でこそ子どもだんじりと大人だんじりを合わせると15台にも及ぶが、昭和40年代後半には喜志・櫻井・若一の3台のみが宮入りに参加し、その他の町はだんじりを所有していなかったという。しかし、だんじり事故が発生し、あらゆる問題が

発生したことから宮入りへの参加を取りやめる町が出た。その結果、最も少ない時期でわずか2台しか宮入りしなかったという。昭和後期には徐々にだんじりが復活し始めたが、平成に入ってから宮入りに参加するだんじりが急増、とりわけ平成7年頃を境に増えていった。同年には当社御造営が行なわれ、これを機にだんじりを復活させる動きが加速した。もちろん、御造営までにだんじりを復活させた町もある。当然、復活させるためにも費用は膨大にかかるため、現在の大人だんじりとして復活させずに、小規模である子どもだんじりとして復活させる町もあった。このように町によって復活の手法は様々であるが、少なくともだんじりの賑わいをもって神への感謝の気持ちを表すとするならば、事故による影響からだんじりを控えなければならぬという思いと、神への感謝の気持ちを表すためにもだんじりを出さなければならぬという人々のジレンマが伺える。

さて、だんじりの数が少なかった頃は、だんじりの曳行中に所々で俄の披露があったという。この俄は花俄と呼ばれ、寄付金である「御花」に対する感謝の気持ちから披露していた。現在となっては、だんじりの数が増えたことによってこれまでだんじりを町内で曳く際に行なっていた俄も、現在では全体的に数が増えたことから後宴祭の奉納俄と、後宴祭の夜に各町が自町で披露する俄のみとなっている。一方、喜秋会や美魂連が発足してからは、だんじりを用いたイベントが行なわれている。したがって、当社秋季例大祭においてだんじりは欠かすことのできない存在であり祭りの象徴となっているといえるだろう。さらに、地域住民だけでなく見物に来る外部の人間も満足できるイベントを用意し、そのツールとしての機能も有していると考えられる。

一方、神輿については神輿渡御を子ども神輿で行なっていることもあり、現在は子どもの活躍を親や地域の人々が見守るものとなっている。かつては、農家を営んでいた人々が寄り集まって大神輿を盛大に担いだというのが、現在はその影は残っていない。とは言え、五穀豊穡を感謝するという意味合いが消失したのではなく、子どもが神輿渡御の役を担っているのである。

## (2) 国や行政・警察との関係

ここで、祭りを行なう上での国や行政・警察との関係について述べていきたい。国との関係について見てみると、地域活性化を促進する動きとして法整備がある。法整備は少なからず地域そのもの、あるいは祭りそのものにも影響を及ぼしている。祭りとの関連で言えば、平成4年(1992)に通称「お祭り法」が制定された<sup>(18)</sup>。同法の第1章総則内の第1条目的には「この法律は、地域伝統芸能等を活用した行事の実施が、地域の特色を生かした観光の多様化による国民及び外国人観光旅客の観光の魅力の増進に資するとともに、消費生活等の変化に対応するための地域の特性に即した特定地域商工業の活性化に資することにかんがみ、当該行事の確実かつ効果的な実施を支援するための措置を講ずることにより、観光及び特定地域商工業の振興を図り、もってゆとりのある国民生活及び地域の固有の文化等を生かした個性豊かな地域社

会の実現、国民経済の健全な発展並びに国際相互理解の増進に寄与することを目的とする」とある（傍点筆者）。祭りを地域活性化のための一資源として活用することを法律で認めているのである。地域活性化のため、担い手を含む地域の人々にとっては全く予期せぬ来訪者を歓迎することを推奨するものだ。都市祭礼であれば、祭りの担い手となる地域住民だけでなく、見物人としてやってくる地域外の人間の存在も必要不可欠となり、まさしく「見る／見られる」の関係性が顕著に表われてくるが、農村部での祭礼は必ずしもそうであるとは言えず、積極的に外部から人々を呼ぼうとする動きを推奨することがうかがえる。

そして、当社秋季例大祭の象徴ともなっているだんじりの曳行や神輿渡御をするためにもある程度の制約は課される。だんじりの曳行や神輿渡御で用いる場所は道路であり、それは国が管理しているものである。したがって道路を使用するためには警察の許可が必要であり、1つの祭りを行なうためにも警察の協力が必要不可欠であり、地域と警察との関係性も問われることとなる。道路交通法に基づく道路使用許可は、管轄の警察署に対して申請書を提出し、警察署長等に承認される必要がある<sup>(19)</sup>。そして申請は町ごとによって行なわれ、宮では秋祭り実行委員会内の曳行部の署名とともに代表者が警察へ提出している。申請にも費用がかかり、これには町ごとに費用を捻出していて、いわば祭りを行なうために道路使用料を支払っている形となっている。当社秋季例大祭では見られないが、祭りを行なうために行列の警備を要請する必要が出てくる場合も地域によってはある。警備については地域内で賄える場合もあれば、警備会社へ依頼し警備員を雇うという方法もあるが、道路の使用については警察以外に依頼することができない。したがって、警察からの道路使用許可が得られなければ、祭りの全てを行なうことが事実上不可能となってしまう。しかも、許可証は祭り期間の3日間一括で発行されず、だんじりが決められた時間に蔵に戻された時点で翌日の許可証が発行されるため、許可された時間以外にだんじりを曳行しているなどが発覚した場合は、翌日を含めてだんじりが曳行できなくなるなどのペナルティが課せられる。したがって、祭りの全てを行なうためには警察という1つの権力や、法律に地域住民は従わざるを得ない現状がある。

### （3）当社秋季例大祭の特徴

それでは現代における当社秋季例大祭の特徴とはどのようなものか。この問題を解決するカギとなるのは祭りの変化であろう。つまり、当社秋季例大祭の変化が認められる時期は高度経済成長期前後及び美魂連・喜秋会が発足された時期であり、農村であった同地域が宅地造成化といった土地開発によって地域の様相が変化し、さらに生業が大きく変化した。それでは、高度経済成長期から美魂連・喜秋会が発足されるまでの頃の祭りをみていきたい。先述の通り、美魂連は今から20年ほど前に、喜秋会は今から5年ほど前に成立した組織である。当社秋季例大祭は昭和55年頃までは10月16日～18日の3日間を祭日として行なっていた。しかし、祭日を日付で固定していると、安定して祭りを営むことが現実的に厳しくなったことから、現在の宮



司が祭日を変更した。土曜日・日曜日・祝日は、地域内外問わずに人々が集まりやすいためである。これは祭日を日付で固定して行なうことは、生活パターンの変化は致命的であり、現代において時代に見合ったものであるとは言えないことから、祭日を変更することはやむを得ないだろう。しかも、変更するまでの3日間の祭りの内容は現在と変わるところはほとんどなく、喜秋会や美魂連の主催によるイベントがなかった程度であったという。また、神事とだんじり関連行事は明確に区分されていて、双方において人手が必要である。当社宮司と祢宜は祭日を変更させたことに関しては肯定的であるが、他の神社の神職からは「祭日を変更させたことで、だんじりを曳行する日と神輿を出す日を別に設定しなければならなくなり、1度に終わらせることができなくなった」など、祭日を変更することに対して否定的な声も少なくない。

これらのイベントに共通することとして、だんじりの存在がある。駅前ロータリーを用いてのイベントは地元民だけでなく、だんじりファンや祭りファンといった地域外の人々もやってくる。だんじりを用いたイベントが地域内外を問わずに祭りを楽しむためのものとするならば、開放的な祭りであると言える。担い手に注目してみると、宮町では極めて厳格な参加ルールが定められているが、それは他の町と比べても特異な例であるという。地域外の他所者を受け入れるか否かが大きな特徴であるが、緩やかな閉鎖性は認められるも厳格なものではないだろう。

一方で、神輿については大神輿の破損により子ども神輿として神輿渡御を復活させ、さらには大神輿を氏子によって復活させたが、大神輿をかつてのように豪快に担ぐことができる人々はほとんどおらず、神輿渡御のバトンを子ども神輿に渡していることは否めない。そして、子ども神輿によって渡御をすることで、子どもの行事になっており、神輿渡御の際には子どもの保護者が多数集まるという状態が続いている。

以上より、当社秋季例大祭を地域の特徴に着目しながらまとめてみると、①祭りを観光要素としていない、②祭礼の象徴であるだんじりを用いた、現代に見合った地域住民によって創り出された祭礼、③祭礼が行なわれる地域が宅地造成化され地域の様相が変化した、④高度経済成長期を境に祭礼が変容した、以上の4点に焦点を絞ることが可能だろう。その祭りを見物するために他所からやってくるという点では、都市祭礼においても共通するが、少なくとも当社秋季例大祭は観光目的とした資源として扱っていないし、先に上げた祇園祭など比べるとはるかに見物人は少ない。行政や民間の観光協会などが祭りを観光資源として積極的に捉えていない点では都市祭礼とは異なると指摘できよう。だが、祭りの象徴ともなっているだんじりをイベントのツールとして用いながら地域住民だけでなく見物に来る人々を楽しませ、魅了させる機能を持つことに変わりはない。

そして、当地域の大きな特徴としてかつては農村として栄えていたが、生業の変化と共に田畑が減少し、山間部も宅地造成され、新興住宅地として切り開かれたことである。宅地化が進むことで、必然的に人口の流動性は高くなっていく。したがって、宮町のような厳格なルール

を定めて祭りを行なうことは不可能ではないにしても、安定した祭りの営みは困難であることに変わりはない。当然、地域外の人々がだんじりを有する町内にやってきて参加するということもありえるが、これは独自でイベント的要素を付加させていくという動きを加速させている一因ともなっているだろう。南河内郊外の祭礼は高度経済成長期以降に、あらゆるイベント的要素が付加されながらも観光資源ではないものがある。一方、だんじり曳行を行なうために警察や法律といった国家権力によるある程度の制限があり、地域住民の祭礼に対する思いとのバランスをとった祭礼であると位置づけることが可能だろう。これらは極めて現代的な特徴であり、祭礼を行なっている間も、社会はリアルタイムに動いており、車社会となっている今日だからこそ警察からすれば「万全を期すため」にやむを得ないと言えるだろう。

### むすびに

本稿では当社秋季例大祭の現状を把握しながら、高度経済成長期から美魂連・喜秋会の発足時期を一つの祭礼の変化にとらえ、現在の祭りの内容について専らだんじり曳行の点から着目した。それは、人々の生活スタイルの変化によって見出されたものであり、祭りの変化、例えば祭日の変化は生活スタイルに合わせるためにも必然的であったとも言えるだろう。そして、だんじりを用いてさらに祭りそのものを盛大にさせようとする動きが伺える。少なくとも、祭日を変化させたことに対しての賛否両論はあるものの、時代に見合った形として、そして地域住民だけでなくだんじりファンや祭りファンといった地域外の人々をも楽しむことができるような、イベント的要素を付加した祭礼である。まさに、祭礼に関わっている地域住民によって伝統を守りつつも新たに創った祭礼である。

当社秋季例大祭は一見すると都市祭礼のようにも見えるが、冒頭で述べたように大都市における祭礼を都市祭礼とするならば、条件として当てはまらない。また、当該地域は現在となつては農村でもないため、村落祭祀とも呼べる祭礼でもない。まさにどちらの性格に当てはまることのないことが指摘できる。「郊外」における祭礼は、本稿で取り上げた地域以外にも多数存在している<sup>(20)</sup>。それらの事例から「郊外」における祭礼をどのように位置づけることが可能なのが今後の祭礼研究の大きな課題といえるだろう。

#### 〔注〕

- (1) 石川の研究は、祭礼研究は民俗学・文化人類学・社会学などの分野において、非宗教的なイベントを対象とした研究が展開されていることを指摘し、「よさこい系」など、地域的な枠組みを超えて日本各地で受容されているもの、宗教的な意味合いが薄れる中でイベント化した「伝統的」な祭りや祭礼、産業祭りや市民イベントなど、行政やメディアによって創造されたものに分類することが可能だと述べた。
- (2) 祭礼実施の課題として、菊池の論考は大きなポイントで分けるとするならば「人」「継承」「費

用」である。少子高齢化が進む中で、祭礼の継承は深刻な問題となっていて、継承すべき内容は子どもの時から慣れて体で覚えていくものであることから長期間を要する。一方で人手不足の場合、アルバイトを雇って必要な人足を満たしている場合もある。本論の中では、高山自動車短期大学の学生に依頼している事例を紹介しているが、必ずしも必要な人数が満たされとは限らない現状を報告している。また、祭りを運営していく上で国や地方自治体から補助が出ても、祭りに関わる人数の減少により1人あたりの負担が莫大なものとなっていることを述べている。

- (3) 金は、祭りというコンテキストにおける他所者は「個人」あるいは「集団」を含意すると指摘し、「ヨソモノ」を「ある地域社会の構成員或いはその集団によって、当該地域における居住場所・期間・地域性・歴史性を伴う生活・規範・文化様式というコンテキストから、自分たちとは異なる存在として認識される個人または集団」と定義した。その上で、祭礼の出し物には直接参加しないものの、地元に住んでいる住民も見物人のカテゴリーに入り、観衆=見物人はある地域社会における地理性を超越し、当該地域の生活・文化様式の形成・維持・変化に関わる歓待されるヨソモノであると述べている。
- (4) 大久保らの研究は、過疎化・高齢化が進んだ山村を事例とし、居住者が近い将来自分だけが集落に暮らすようになるのではないかという不安や、自分が死んだ後の集落への不安があるという実態に注目し、他出者は集落にどの程度関わることができるのかその可能性について指摘している。
- (5) これまでの祭りの意義は、人々は神を招き奉仕してなごませ感謝を捧げた上で、願を聞き届けてもらおうとするものであるとされていたが、入江はこれに対して、祭りはその時々の人々の願いを反映させて営まれるものであると指摘している。入江は本論において、現代の事例はもちろん、近世期の事例からは『岩城名所記』『歳時民俗記』を、近代の事例からは『古社祭典及神楽音楽調』を史料として用いている。
- (6) 『日本民俗大辞典 下』p.208
- (7) 『現代社会学事典』p.390~391
- (8) 若林幹夫『郊外の社会学—現代を生きる形』P.P.40~41
- (9) 若林幹夫他『「郊外」と現代社会』p.21・p.23
- (10) 近畿日本鉄道ホームページ「駅別乗降人員」のデータによる。(近畿日本鉄道調査日：平成22年11月9日〔火〕)
- (11) 本稿では専ら宮の事例を用いることとする。なお、地名としての宮町は宮町、日常における町会としての宮町は「宮町」、だんじりでの宮町は宮と表記することとする。
- (12) 本稿では2013年~2014年に筆者が行なった調査から得たデータに基づくものとする。
- (13) 大阪府神社庁では計12の支部に分かれており、当社が所属する第11支部は藤井寺市、羽曳野市、富田林市、河内長野市、大阪狭山市、太子町、河南町、千早赤阪村内にある神社が所属している。支部内であれば、他の神社の祭りの際に神事の応援へ神職が行くことは一般的になっている。

るという。当社秋季例大祭では、河内長野市の住吉神社や同市の加賀田神社から神職が来るが、これは、河内長野方面の秋祭りは一週前に行なわれ、神職が応援に行くことが可能だからだという。

- (14) 2013年は櫻井と川面が稚児および乙女舞の当番町、2014年は喜志と喜志新家、木戸山、東阪田が当番町であった。
- (15) 本稿においては、だんじりパフォーマンスをシャクリという用語に統一する。
- (16) 通し番号の順に宮入りは行なわれる。子どもだんじりが宮入りを終えると、連続して大人だんじりも宮入りを行なう。
- (17) 2013年は雨天により神輿昇きは中止となった。
- (18) 正式には「地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律」という。
- (19) 大阪府の場合、必要書類などは大阪府警のホームページよりダウンロードすることが可能となっており、申請に際しての諸注意なども記されている。
- (20) 例えば京都の亀岡祭などがそれにあたる。

#### 〔参考文献〕

- 石川俊介「祭りにおける「イベント」の形成に関する基礎研究―諏訪大社下社御柱祭「木落し」の事例から―」（『名古屋大学人文科学研究』第37号）2008年
- 入江英弥「祭りの変遷と意義―福島県いわき市御宝殿熊野神社の祭礼と芸能」（『地域学10巻 地域の理解にむけて』）2012年
- 大久保実香他「祭りを通してみた他出者と出身村とのかかわりの変容―山梨県早川町茂倉集落の場合」（『村落社会研究ジャーナル』17-6）2011年
- 菊池淑人「祭礼を支える「組」組織とそれを取りまく社会変化―岐阜県高山市旧城下町地域における伝統的祭礼を事例として」（『日本建築学会計画系論文集』第77巻第681号）2012年
- 金賢貞「都市祭礼におけるヨソモノの存在とその意義―茨城県石岡市常陸国總社宮大祭を事例に一」（『日本民俗学』第246号）2006年
- 田中宣一「現代の祭り状況と祭り類型化の試み―大分県佐賀関町「関の権現夏祭り」を例として―」（『民俗学研究所紀要』第28集）2004年
- 濱田時実「南河内における神社祭祀と住民組織：大阪府南河内郡太子町山田の例を中心に」（『鷹陵史学』第38号）2012年
- 若林幹夫『郊外の社会学―現代を生きる形』2007年　ちくま新書
- 若林幹夫他『「郊外」と現代社会』2000年　青弓社

#### 〔原典資料〕

eGov（イーガブ）地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関



する法律 <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H04/H04HO088.html>  
eGov (イーガブ) 行政機関の休日に関する法律  
<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S63/S63HO091.html>  
大阪府警察 (道路交通法に基づく申請書)  
[http://www.police.pref.osaka.jp/08tetsuduki/dorokotsu/dorokotsu02\\_1.html](http://www.police.pref.osaka.jp/08tetsuduki/dorokotsu/dorokotsu02_1.html)  
近畿日本鉄道「駅別乗降人員」 <http://www.kintetsu.co.jp/tetsudo/f.html>  
富田林市ウェブサイト  
<http://www.city.tondabayashi.osaka.jp/>

(はまだ よしのり 文学研究科日本史学専攻修了)

(指導教員：八木 透 教授)

2014年 9 月26日受理